

寅彦の見た風景 5

野村 学

【延命軒編】

「本町延命軒ナル蓑田教員ヲ訪問ス 相変ラズ気楽ナル事ナリ。」

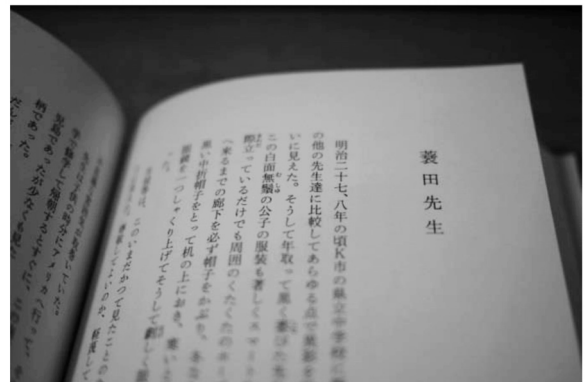
(明治 29 年 4 月 24 日の日記より)

○はじめに

『生誕百年記念増補改訂 寺田寅彦郷土随筆集』(※1) (以下『郷土随筆集』) の注釈によれば高知市本町 90 番地、現在の住居表示でいうと高知市本町 1 丁目 3 番 20 号あたりに、この日寅彦先生の訪れた延命軒があった。延命軒は戦前まで営業していた「海南第一の近代的理想旅館」(※2)。寅彦先生の随筆『蓑田先生』(※3) によりその名を遺した蓑田長正先生の下宿先である。今回はその「延命軒」跡を訪ねてみたい。

○蓑田先生について

『郷土随筆集』から引用すると「蓑田先生は、名は長正。慶応三年二月十一日生。鹿児島県鹿児島郡千石馬場町二三四番戸、士族蓑田長喜三男。大正七年十一月二十八日死去。高知県尋常中学校には、明治二十八年一月から三十一年四月まで講師として在職。」とあり、寅彦青年の尋常中学校四年生の途中から卒業時までの在学期間に重なる。随筆『蓑田先生』によると寅彦の卒業後、先生は校長と喧嘩して退職。「去るに臨んで生徒を講堂に集めて旧思想打破の大演説をやった」(※3) ということである。このエピソードや寅彦と夏目漱石の関係などから、蓑田先生の“坊ちゃん”モデル説もささやかれている(※4)。私などは“坊ちゃん”だけでなく『三四郎』の“広田先生”にも蓑田先生の DNA の一部が(ほんの一部であるとしても)流れているのでは? と疑うものである。これは全くの余談。いずれにしても“相変わらず気楽な”蓑田先生をこの日、寅彦青年は訪れた。なお、蓑田先生の名前の表記には“長政”や“長生”などもあるが、ここでは『郷土随筆集』の長正に従う。



○延命軒について

さて、その延命軒。残念ながら戦火に焼かれ建物は残っていないが、戦前に作成されたと思われる一枚の絵葉書にその姿を見ることができる。それが下の写真1。右上は絵葉書全体。左下はその一部を拡大したもの。「高知 旅館 延命軒(玄関)」と説明書きがある。楕円形や菱形の虫籠窓^{むしこまど}を持った典型的な町家建築の建物に両側を挟まれて、それらと対照的に近代的な西洋建築の建物が建っている。三階建だろうか。蓑田先生はその二階に下宿していたはずだ。「先生はK市で一等の旅館延命軒の二階に下宿していた」、「宿屋の二階の先生の居室は他の多くの先生の室よりも一体に綺麗で明るく色彩に富んで居た」(※3)。この写真の撮影時期は不明だが電線や路面電車の軌道が見られることから、寅彦先生の訪れた時より後年のものであることは間違いない。



写真1 延命軒の絵葉書（絵葉書資料館所蔵）

○延命軒のあった場所・堀詰

それでは延命軒跡を訪ねてみよう。右の写真2中央やや左の背の高いビルの住所が『郷土随筆集』の注釈で延命軒のあった場所とされる「本町1丁目3番20号」。このあたりに延命軒はあったようだ。もちろん寅彦先生の訪れた明治29年の当時と現在では120年余りの隔りがあり、このビルをそのまま入れ替えた場所に延命軒が建



写真2 延命軒のあったところ



写真3 戦前の堀詰を写した絵葉書（絵葉書資料館所蔵）

の呼称である。狭義の「堀詰の町とは東一丁目の北片側町だけのこと」であったが「明治十年代になれば北も南もひっくりかえって堀詰界限ということになった」そうだ。現在この名の住居表示は存在しないが、路面電車の電停にその呼び名を残している。延命軒はまさにこの“堀詰”と通称される地区にあった。吉村氏の『堀詰』には「ホリヅメの語音に一種華やいだひびきを感じる人はまだ多いだろう」とか「(明治)十四年の暮れには、(略)芝居小屋・堀詰座が誕生する。この堀詰座は昭和の第二次大戦で焼失するまでつづいた。(略)高知町の人気の中心であった」などとあり、このあたりが当時の盛り場であったことが伺える。ここに登場する“堀詰座”は寅彦先生が子供の頃、“硝子を食う山男”(※6)を見た現場でもある。「むかしの堀詰の町は、幾時代かを経てもなお、人の想いのたかぶりを、やわしたり、つぶしたりする浮世町として、昭和の現代へまでも遺っていた懐かしい場所」であったと吉村氏はいう(参考:写真3)。現在は銀行や証券会社などが立ち並ぶ。

○蓑田先生との出会いの場所

以上が延命軒のあった本町堀詰の寅彦青年当時の様子であった。蓑田先生は、このよう

っていたわけではないだろう。

ここで吉村淑甫著『鏡川原ヲ歩ミテ笛ヲ聞ク』(※5)所収の「Ⅲ高知街風俗記-堀詰-」(以下『堀詰』)を引用(「」内)しながら当時のこのあたりの様子を見てみよう。“堀詰”とは延命軒のあった本町1丁目の東付近のことで、「旧藩時代の廓中=侍屋敷を取りまくお堀の詰」であったことからこう呼ばれた昔

な街の雰囲気の中で下宿していたのだろう。「他の先生達に比較してあらゆる点で異彩を放って居た」、「身边を不思議な雰囲気が取巻いて居た」、「全く独創的な出で立ちで本町の人通りを歩いて居ることもあった」(※3) 蓑田先生の下宿先としてはこの場所がもっともふさわしいというべきだろう。そして延命軒のあったこの街の雰囲気とともに蓑田先生はその下宿部屋で寅彦青年に“^{アポカリプス}啓示”を与え、後年、寅彦先生に『蓑田先生』という随筆を書かせるほどの人間的魅力を開示したのではないだろうか。寅彦青年と蓑田先生の出会いについて『寺田寅彦 バイオリンを弾く物理学者』(※7) では「蓑田との出会いが、のちに熊本五高で夏目漱石や田丸卓郎と出会っていくための「心」の下地を用意したことを考えると、その出会いが持つ意味はもっとも掘り下げられる必要があるだろう」と評価されている。そういう意味では、この延命軒跡地は“寅彦先生-蓑田先生との出会いの場所”として記録するに値する場所と言えるのではないだろうか。卒業を3ヶ月後に控えた寅彦青年は、この日、蓑田先生といったいどんな話をしたのだろう。

○おわりに

前掲『寺田寅彦 バイオリンを弾く物理学者』では、蓑田先生について「寅彦が書き残した「蓑田先生」が、先生の生を蘇らせ得る手がかりとして私たちのまえに残されている以上、今後ともこのテキストを抛りどころにして、先生を忘却の淵からすくい上げるための努力を続けることが、寺田文学を愛するものの背負うべき責務であるといっているだろう。」と記されている。その“責務”を果たすひとつとして、寅彦青年が「見た事もないような立派なトランク」や「コスモポリタンとかレビュース・オブ・レビュースとかそういう雑誌」を見せられ「自分の将来に見るべく聞くべく広い世界への憧憬の炎をもえたたせた」(※3) 蓑田先生の下宿がここにあったことを記憶に留めておきたい。

引用文献・参考文献

※1『生誕百年記念増補改訂 寺田寅彦郷土随筆集』(高知市教育委員会・昭和53年)

※2『懸賞字探し附高知案内(昭和七年九月号)』(『描かれた高知市 高知市史 絵図地図編』・高知市・平成24年に収録されたものから引用)

※3『蓑田先生』(『寺田寅彦全集 第一巻』・岩波書店・1996年/初出:昭和6年12月・『理学部会誌』)

※4例えば『寅彦を読む』(細川光洋・『心伎』発行書・2007年)や『寺田寅彦 バイオリンを弾く物理学者』(末延芳晴・平凡社・2009年)など。

※5『鏡川原ヲ歩ミテ笛ヲ聞ク』(吉村淑甫・和田書房・1998年)

※6『柿の種』(寺田寅彦・岩波書店・1999年)

※7『寺田寅彦 バイオリンを弾く物理学者』(末延芳晴・平凡社・2009年)